【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

| 都道府県名 | 愛　知　県 |
|---|---|

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

| 学校名 | 設楽町立設楽中学校 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 学　年 | １年 | ２年 | ３年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 2 | 2 | 2 | 2 | 8 | １８ |
| 生徒数 | ４６ | ４２ | ４３ | 3 | １３４ | |

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

明日を拓く確かな学び - 経験のネットワークと評価を生かした授業づくり -

２．研究内容と方法

⑴　実施学年・教科

・全学年・数学
　数学は、どの学年においても習熟の差が大きいので、ＴＴ指導・少人数指導による、個に応じた、きめ細かな指導が必要であるため。
・全学年・英語
　入門期の指導では、ＴＴ指導・少人数指導による、個に応じた、きめ細かな指導が必要であるため。

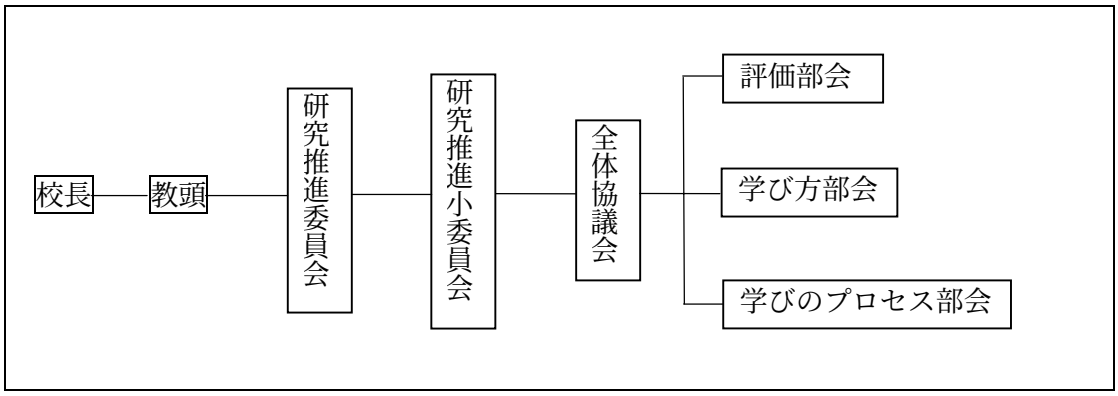
⑵　年次ごとの計画

| | |
|---|---|
| 平成14年度 | ○　テーマ<br>明日を拓く確かな学び - 評価を生かした授業づくり -<br>○　研究の見通し（仮説）<br>・　教科学習における基礎・基本をおさえ、学びの途中で的確な評価とそれを生かした支援をすることによって、生徒に確かな学力を身につけさせることができるだろう。<br>・　自分で学びを振り返り、自己選択によって自分に合った学習コースを選んで学ぶことにより、学習意欲が向上し、教科の基礎・基本が身につきやすくなるだろう。<br>○　研究の内容・方法<br>・　子どもたちに確実に身につけさせたい各教科の基礎・基本は何であるかを明らかにする。<br>・　どの場面で何をどのように評価していくのか明らかにして、評価規準表を作成する。<br>・　自己評価などを継続的に行い、子どもの変容をとらえていく。<br>・　自己選択によって自分に合った学習コースを選んで学習できる授業づくりをする。<br>・　自主学習の時間や補充学習の時間を設定し、基礎・基本の定着とともに家庭での学習の習慣づけにつなげる。 |

| | |
|---|---|
| 平成15年度 | ○　テーマ<br>明日を拓く確かな学び－経験のネットワークと評価を生かした授業づくり－<br>○　研究の見通し（仮説）<br>「学びのプロセス」と「互いに学び合い、支え合う（優しい心）」に視点をあて、新たに「経験のネットワーク」という考え方を取り入れたため、以下のように仮説を修正した。<br>・　学習や生活経験のネットワークを生かし、評価を生かした授業を展開すれば、『学ぶ意欲』が高まり、『基礎・基本』の習得とともに『思考力・判断力』や『表現する力』が育つであろう。<br>・　教育活動全体を通して、仲間と支え合い、学び合う素晴らしさに感動する場を意図的に設定すれば、共に生きようとする優しい心が育つであろう。<br>○　研究の内容・方法<br>１年次（14 年度）は理論構築の期間、２年次（本年度）は確かな学力に視点を当てた教科指導中心の実践研究の期間、３年次（16 年度）は確かな学力と優しい心に視点を当てた、道徳、特別活動等を含めた教育課程全体を通した実践研究のまとめの期間と位置づけている。<br>・　数学科と英語科の全学級で、複数教師によるＴＴ指導・少人数指導を取り入れ、理解が遅れがちな生徒にも、進んでいる生徒にも対応できるようにする柔軟性のある授業づくり。<br>・　すべての教科で、学習のもとになる生徒たちの経験（学習経験･生活経験）をとらえ、その経験のネットワークを生かした授業づくり。<br>・　授業における評価の場面や方法を考え、生徒も教師も評価を共有しながら、個々の生徒に寄り添った授業づくり。 |

| | |
|---|---|
| 平成16年度 | ○　テーマ<br>明日を拓く確かな学び－経験のネットワークと評価を生かした授業づくり－<br>○　研究の見通し（仮説）<br>・　学習や生活経験のネットワークを生かし、評価を生かした授業を展開すれば、『学ぶ意欲』が高まり、『基礎・基本』の習得とともに『思考力・判断力』や『表現する力』が育つであろう。<br>・　教育活動全体を通して、仲間と支え合い、学び合う素晴らしさに感動する場を意図的に設定すれば、共に生きようとする優しい心が育つであろう。<br>○　研究の内容・方法<br>・　生徒が置かれている状況（一人ひとりの生徒の学習や生活経験のネットワーク）をより具体的に、より深くとらえ、学力の一層の向上を図る。<br>・　生徒が毎時間行う自己評価の中の５段階で数値化する項目の「意欲」「達成度」「満足度」を単元全体を通じて分析し、教材の有効性や単元展開の不備、個への配慮の問題点をつかみ、授業改善のために有効に活用する。<br>・　「優しい心」のキーワードである『互いに支え合い、学び合う心』の実践を意図的な計画のもとで検証する。 |

(3)　研究推進体制




Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

◦　生徒のもつ「学習や生活経験のネットワーク」を授業に生かそうとしたことで、生徒の意識や思考の流れがこれまで以上に把握できるようになり、一人ひとりの生徒に寄り添った授業展開ができるようになってきた。

◦　毎時間の生徒の自己評価と一言記述をもとに、生徒の学習内容に対する理解の様子（分かり方や疑問点、つまずき）をとらえることで、教師による評価との微妙な違いを明確にすることができ、単元の流れを必要に応じて修正することができるようになった。

**生徒たちは真剣な眼差しで授業に臨むことができるようになってきている。**

◦　実践単元において、単元の流れと表裏一体となる評価の計画（具体的な評価規準の策定と支援方法の工夫）を考えたことで、教師自身の評価観が、生徒を主体としたものへと変わってきた。

◦　授業の基本として、「生徒の心構え」「教師の心構え」「活力ある授業を目指して」を生徒も教師も確認し合ったことで、常に己の足元をみつめる着実な授業を創り上げようと日々努力するようになった。

平成１４年度と本年度の教研式標準学力検査の結果（いずれも４月実施）は、下記のようである。

○現３年生

| 年 度 | 数　学 | 英　語 |
|---|---|---|
| １４ | ４９．７ | ４７．９ |
| １５ | ５０．５ | ５０．３ |

○現２年生　（学年偏差値平均）

| 数　学 | 英　語 |
|---|---|
| ４７．８ | － |
| ５０．１ | ４７．３ |

ＴＴ指導・少人数指導を取り入れている数学科と英語科については、わずかであるが、学力が向上してきていることがわかる。

領域別で見ると、数学科については「数と式」、英語科については「聞くこと」「書くこと」が全国平均をやや下回っている。どれも、日常的な反復練習が必要な領域である。授業時間内の学習だけでは十分な効果が得られにくい領域とも言える。自主学習をより充実させる手立てを講じる必要がある。

２．今後の課題

・　一人ひとりの生徒の学習や生活経験のネットワークをつぶさに把握するのは難しい。しかし、生徒が置かれている状況をより具体的に、より深くとらえようとする目をもつことは大切である。日々の実践で生徒と真剣に向かい合う中で、教師自身が磨いていかなければならないことである。

・　生徒が毎時間行う自己評価の中に、「意欲」「達成度」「満足度」を５段階で数値化する項目がある。しかし、授業では聞こえなかった生徒の生の声としての一言記述に目が向いてしまう現状はある。主観ではあっても生徒が数値化した項目も、単元全体を通じて分析することで、教材の有効性や単元展開の不備、個への配慮の問題点を知ることができると考える。有効に活用したいものである。

・　「確かな学力」に視点をあてた実践を中心に行ってきた。「優しい心」のキーワードである『互いに支え合い、学び合う心』の一端は、日々の授業の中でも見られるようになってきたと自負しているが、意図的な計画のもとでの実践、検証までは至っていない。本実践研究を総括する上で、成し遂げなければならない最大の課題である。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

・　毎年１学期初め（４月）に、各学年とも教研式標準学力検査を実施している。

・　年間５回の定期テストを位置づけ、学習状況を把握し、指導の改善に生かしている。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・　学習指導研究発表会を実施

日　時　　平成１５年１１月５日㈬

場　所　　設楽中学校

対　象　　新城設楽地区を中心とした学校関係者、本校ＰＴＡ関係者(１５４名)

目　的　　学力向上フロンティアスクールとして、授業公開、研究発表、研究紀要を通じて取組状況を知らせた。

・ホームページ開設に向けて準備を進めている。

【新規校・継続校】　☐ 15 年度からの新規校　☒ 14 年度からの継続校

【学校規模】　☐ 3 学級以下　☐ 4～6 学級　☒ 7～9 学級　☐ 10～12 学級　☐ 13～15 学級　☐ 16 学級以上

【指導体制】　☒ 少人数指導　☒ Ｔ・Ｔによる指導　☐ その他

【研究教科】　☐ 国語　☐ 社会　☒ 数学　☐ 理科　☒ 外国語　☐ 音楽　☐ 美術　☐ 技術・家庭　☐ 保健体育　☐ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☒ 有　☐ 無